
浪漫飛行

上月茉莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浪漫飛行

【Nコード】

N2340T

【作者名】

上月茉莉

【あらすじ】

有弥は夏祭りで不思議な少女に会った。

ばあ、と夜空に色とりどりの花が咲いた。

緑、赤、白。

こんな町内会の夏祭りに打ち上げる花火としては勿体無い程綺麗だった。有弥は先程購入したばかりの赤い風船を手にして、頭上に咲く花をぼんやりと眺めていた。

どおん、と胸に響く低音は何故だか有弥には自分の中で震える心音に聞こえ、心地良さに目を瞑る。

誰も居ないと思っていた神社の片隅に、鈴の鳴る様な可憐なくすくすと言った笑い声が、有弥の耳を柔らかく擦った。驚いて振り返る。

振り返った有弥の瞳に映ったのは、真つ黒な癖の見られないおかつぱ頭の少女だった。猫の様につり上がった勝ち気な印象を与える瞳は、白色を基盤にした花を描いている仄かに青いその浴衣に良く映えていた。

何時の間に、砂利の音をさせずにそこに居たんだろうか。疑問は疑問だったが、有弥には笑われていると言う事自体が彼の小さな自尊心を擦った。

「なんだよ」

膨れた頬と口調だった。少女はそれを見て笑いを抑えて、境内の石で出来た柵から腰を上げる。

また鮮やかな花火が上がった。

「うっとりする位、花火好き？」

少女はやつと口を利いた。少女が手にしている縞模様の水色の風車が夏の蒸し暑い風にコロコロと回る。

「好きだよ。大きくなったら花火師になりたい」

そうとだけ返して、また紺碧の空を見上げる。散り行く花火の残滓だけが映った。

「ねえ、私梨華。お友達にならない？」

「……嫌だ」

思春期に足を踏み入れ始めた有弥は間髪入れずに否定する。

「そう」

残念そうな呟きが耳に届く。けれど梨華は有弥が何か続ける前に有弥の隣に立ち、有弥の手を取る。ひんやりとした手だった。鰻掴みか何かで冷えたのだろう。

「じゃあ一緒に回ろう」

梨華は有無を言わせなかった。

「一人で回りなよ」

重なつた体温に頬までも熱くなるのが解り、それを悟られない為ではないと思うが手をぱつと強く振り解く。自然と言い方もきつくなつた。

別に梨華は気にも止めなかったらしい。真意の読めない微笑を浮かべて空を見ていた。もう花火は上がらなかった。

「ねえ、何て言う名前？」

「有弥。鷹野有弥」

問われたまますつ気なく返す。

ふと思つたのだが、梨華と言う少女は一人で来たのだろうか。「ゆーや、私林檎飴が食べたいんだけど安い出店知らない？」

会つて間もない少女に自分の名前を呼び捨てにされる事は引つかかったが、それで目くじらを立てる程有弥は子供ではないつもりだ。夏祭りの出店と言うのは大抵出店毎に値段がばらばらである。あつちで金魚すくいが四百円だったのに、こつちでは三百円だったりする。それでも夏祭りは雰囲気を楽しめるからか、誰も表立って文句を言わなかった。

「それなら……こつち」

一瞬躊躇つたが、お祭りですう素つ気なく当たる物でもないだろう、と結論付けた有弥は出店の一角を指差して答えた。同級生に会つたりしたら、彼女は隣の家の娘だ、なんてうそぶけば良い。

そうと割り切れれば梨華に対して尖っていた態度も、次第に柔らかくなった。梨華はその対応に嬉しそうに頬を緩める。道案内をしようとした途中、砂利道に躓いてしまい握っていた風船を手放してしまった。紺色の空に舞うひとひらの赤い風船は、有弥には印象的であったが、それよりも三百円の痛手だと瞬時に思ってしまった。

「あ！」

叫んでも風船が戻るわけではない。

有弥は悔しそうに眉を歪めてただ空に消えていく赤を見つめていた。

「……ゆーや、残念？」

口を閉ざしていた梨華が首の向きを変え、有弥の横顔を見ながらぼつりと尋ねていた。

「残念、凄い残念」

溜め息混じりに肩を竦めて頷くと、梨華が身体を向き每変える。

何かと思っただけ風船から視線を外した有弥は、自分の正面に移動した少女を瞬きを数回してから見つめた。

「私とゆーやの、秘密にしてね？」

彼女はそう言って手に持っていた風車を回す。

なんだろう、と理解するよりも早くふわつと有弥の身体が宙に浮いた。何かを言う前に、同じく舞う梨華に手を引かれてしまった。

「秘密だよ」

梨華は念を押す様に再度言う。有弥は自分に起きている事がただ信じられなくて、無意味に無駄に何回もただ強く頷いて返していた。浮遊感に見回れた身体はあつという間に夜空に舞っていた。有弥が恐る恐る下を見ると先程迄自分達のいた神社は、賑やかな灯りが目立つミニチュア模型の様になっていた。有弥は高所恐怖症ではないが握っている梨華の手を離すのが躊躇われて、彼女の体温で中途半端に温まった手を強く握る。それに気付いた梨華がくすりと笑うのが聞こえた。

「ちよっ……」

上手く言葉にならなかったがそれでも何か言わなければいけない気がして、情けない迄に慌てた声を発していた。梨華は振り返り、日本人形めいた何とも言えない笑みを浮かべて言った。

「お散歩みたいでしょ」

笑う彼女の向こうに手から離れていった赤が見えた。思ったよりもこの飛行速度は速いらしい。

「ついた！」

無邪気にそう言って梨華は空いている手を風船へ伸ばす。不安定に漂う紐を掴んだ。

はい、と笑みを浮かべたまま梨華が風船を差し伸べて来る。

「あ、有り難う……」

どことなく呆気に取りられた様な声で有弥はそれを受け取った。

「じゃ、帰ろう」

梨華はそう言い早速下降をした。

行きは余裕が無かったから堪能出来なかったが風は心地良く、日頃住んでいる町を見下ろしているのは気持ち良く、開放感に満ちていた。まるで宝石箱みたいだな、と感じる。

「気持ちいいね」

本心から思った事を小さく呟いたらそれは見る間に夜の闇に溶けていってしまった。梨華は何も言わずにただ笑んでいる。

「ねえ、ゆーやの家見える？」

言われてから辺りを見渡す。小学校の近くにあるから、あそこだろう。

「あれだよ」

眼下に広がる景色の中でも一際大きいマンションを指差す。ふうんと梨華が返して来る。

「なんか、不思議な気分」

有弥は足下の光景に見慣れぬ光景にすっかり馴染んでいる自宅を見て呟いた。

「面白い？」

あんまりまじまじと足下を見ていたからだろうか。梨華が有弥の方を向いて尋ねて来る。

「だって珍しいよこんなの」

「ゆーやにはそうなのかな」

何だかすつきりしない回答を貰った。夜風が心地よかったがそれもそろそろおしまいだろう。短いが、忘れる事が出来ない飛行だった。

やがて地面が近付いて来た。ふんわりとした足取りで着地してから、梨華が手を離れた。彼女が風車を回すと急に周りが現実味を帯びて、騒がしくなった様な気がした。

有弥は風船をきつく握り締める。

「……梨華ちゃん、林檎飴買いに行こうか」

高鳴る鼓動を抑えて冷静に言う。だがそれでも語尾が震えていた様な気がした。

梨華は首を横へ振った。

「うっん、やめる」

簡単に彼女はそう言う和有弥の近くから一步遠ざかる。そして彼女は首を小さく傾げた。

ああ帰るんだな、と直感で思った。

「ねえ、友達になれない？」

彼女は振り返って飛び立つ前と同じ事を聞いて来た。少し間を置いてから答える。

「考えて、おくよ」

「そう」

梨華は嬉しそうに答えた。そして彼女は顔の位置を戻して社に向かって姿を消していく。

その後ろ姿をぼんやりと見送っている有弥の耳には、出店の方角から聞こえる子供の賑やかなはしゃぎ声が届いていた。

祭りも終わり夏休み終盤の頃、有弥は思い立った様に彼女に会った神社に向かっていた。彼女に会えないだろう事は薄らと理解出来

ていた。それでも、彼女の雰囲気、空気を感じたかった。

　　ただ神社にはあの賑やかな夏祭りの空気なんて跡形もなく、ただ儼かな空気が漂っていて、有弥は肩を落とす。そこで会った神主と話した事は大体こんな物だった。

　　この雪見神社　　には、毎年夏祭りになると暇を持って余した神様が気紛れに友達を求めて遊びに見える様だ。雪の別名六花を扱った名前をするらしい。

　　そんな話だった。

　　有弥はその話を聞くと柔らかく笑った。誰に向かってかは判らないが笑んでいた。

　　もしまた会えたのなら、友達になってあげよう。そして林檎飴を贈ろう。そうしたらまた、不思議な体験をさせてくれるだろうか。夏祭りなら、来年きつとまた会える。

　　有弥の頬を、夏にしてはひんやりとした風が通り過ぎていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2340t/>

浪漫飛行

2011年5月13日18時10分発行